

1 児童の実態

(1) 学習状況調査結果の推移

	国語			算数			理科
	5年時	6年時		5年時	6年時		6年時
		A	B		A	B	
H26 入学	68.3			70.2			
現5年	(1.03)			(0.99)			
H25 入学	57.1	72	55	64.2	62	53	60
現6年	(0.93)	(1.01)	(1.02)	(0.98)	(0.98)	(1.04)	(0.98)
H30 正答率の全国比		(1.02)	(1.01)		(0.98)	(1.03)	(0.99)

◎5年時は佐賀県学習状況調査、6年時は全国学習状況調査の推移。

◎上段は平均正答率、下段()は、県平均を1としての比較。

◎「H30正答率の全国比」は全国平均を1としての比較。

(2) 学習状況調査・意識調査から読み取れる実態

○現5年生

国語は県平均を上回り、算数は県平均とほぼ同じであり、おおむね良好な学力状況である。特に国語の「話す・聞く」は県平均を14ポイントも上回り、自分の考えを明確にして話したり、自分の考えと比較しながら聞いたりすることがよくできている。

○現6年生

国語AB算数Bは全国平均及び県平均を上回り、算数A理科は全国平均及び県平均とほぼ同じであり、おおむね良好な学力状況である。5年時と比較すると国算ともに上昇しており指導の成果と言える。

○共通(意識調査)

5・6年ともに「学校の宿題をしている」の項目で高い値が出た。全校一斉の「家庭学習ノート」をはじめ、その他の宿題にもよく取り組み、家庭学習の習慣がよく身につけていることが分かる。

2 改善に向けた具体的な取組

(1) 授業づくり、指導方法の改善・充実のための重点取組

- ・「めあて」から「まとめ」「振り返り」に至る一連の学習過程をどの教科においても基本とする。児童自らが問題解決していく過程を大切にするとともに、『聞く』ことを徹底させて、学習規律を身に付ける。
- ・ICT機器の充実という環境に恵まれている。電子黒板、タブレット、学習者用デジタル教科書等、今後も大いに活用した指導を推進する。
- ・算数科を中心に、TTや少人数指導を継続し、個別の対応の機会を増やして理解度を深める。

(2) (授業以外) 児童・生徒の課題改善のための重点取組

- ・「家庭学習ノート」の書き方や点検方法の見直しを図り、保護者へプリントで周知する。よく書けている児童を賞賛したり、よいノートを掲示したりする。
- ・456年生の「学力向上タイム」に全職員で取り組む。4月調査や12月調査の過去問を解かせ、解説をする。そのために、月に1回火曜日6校時を確保する。
- ・456年生の木曜放課後の基礎・基本の時間を確保する。練習問題を解いて、学習内容の定着を図る。

1 児童の実態

(1) 学習状況調査結果の推移

	国語			算数			理科
	5年時	6年時		5年時	6年時		6年時
		A	B		A	B	
H26 入学 現5年	64.5 (0.97)			67.7 (0.96)			
H25 入学 現6年	59.8 (0.97)	71 (1.00)	56 (1.04)	67.8 (1.04)	63 (1.00)	54 (1.06)	60 (0.98)
H30 正答率の全国比		(1.00)	(1.02)		(0.99)	(1.05)	(1.00)

◎ 5年時は佐賀県学習状況調査、6年時は全国学習状況調査の推移。

◎ 上段は平均正答率、下段()は、県平均を1としての比較。

◎ 「H30 正答率の全国比」は全国平均を1としての比較。

(2) 学習状況調査・意識調査から読み取れる実態

《 生活習慣 》

「普段、1日当たり2時間以上、テレビやビデオ・DVDを見ている」と答えた5年生児童は57.3%(県52.1%)であった(昨年度5年生42.9%)。また、「普段、1日当たり2時間以上、テレビゲームをする」と答えた5年生児童は29.5%(県26.7%)であった(昨年度5年生14.3%)。5年生児童の半数以上が平日に2時間以上テレビ見ており、テレビ視聴やゲームの時間が長い現状にある。

※ 6年生に同様の質問項目がなかったため、昨年調査結果を括弧内に記載。

《 学習習慣 》

「学校の授業時間以外に、普段、1日当たり1時間以上、勉強をしている」と答えた児童は、5年生が59.4%(県60.8%)、6年生が80.5%(県64.2%)であった。また、「土曜日や日曜日など学校が休みの日に、1日当たり2時間以上、勉強をしている」と答えた5年生児童は、33.0%(県25.5%)であった(昨年度5年生26.1%)。週末の学習時間は県平均よりもよいが、学習時間が2時間以上の児童が全体の1/3程度であることから、週末の学習習慣の定着が課題である。

また、家庭学習の内容を見ると、「自分で計画を立てて勉強している」という問いには、5年生の42.9%(県46.6%)、6年生の72.1%(県69.0%)が「している」(「どちらかといえばしている」を含む)と答えている。与えられた課題に対して自分なりに計画して取り組んでいることが分かる。

「学校の授業時間以外に、普段、1日当たり30分以上、読書をしている」と答えた児童は、5年生が42.9%(県46.6%)、6年生が41.9%(県40.5%)であった。読書の習慣を付けることも課題の一つである。

「学校の授業の予習をしている」という問いには、5年生の46.2%(県48.4%)が「している」(「どちらかといえばしている」を含む)と答えている。昨年度に引き続き、校内研究で予習学習を充実させ児童が見通しをもって授業に臨むことができるような取り組みを行っているところである。

《 授業での学び方 》

「算数の勉強は好きだ」と思っている児童は、5年生で66.1%(県68.1%)、6年生で52.6%(県63.9%)

であった。「算数の授業の内容はよく分かる」と思っている児童が、5年生 91.6% (86.3%)、6年生 76.4% (79.5%) だった。

「算数の授業で公式やきまりを習うとき、そのわけを理解するようにしている」児童が、5年生の 75.9% (県 82.2%)、6年生の 83.9% (県 80.7%)、「算数の授業で、問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いている」児童が、5年生の 92.3% (県 88.2%)、6年生の 92.4% (県 88.4%)、さらに、「算数の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないか考える」児童が、5年生の 71.5% (県 75.4%)、6年生の 72.8% (県 66.9%) となった。学習意欲を高め、思考力・判断力・表現力を培う学習スタイルが定着しつつあることが伺える。

《 学習状況調査の結果から 》

6年生の国語Bでは、「目的や意図に応じ内容の中心を明確にして書く」問題の正答率が低い。算数Bでは、「メモの情報とグラフを関連付け、総数や変化に着目していることを解釈し、それを記述できる」問題、及び「棒グラフと帯グラフから読み取ることができることを、適切に判断することができる」問題の正答率が低い。理科では、「より妥当な考えをつくり出すために、実験結果を基に分析して考察し、その内容を記述できる」問題の正答率が低くなっている。

5年生の国語では、「文章の内容を踏まえ、引用や要約をする」問題、算数では、「面積についての感覚を身につけている」問題の正答率が低かった。

5・6年生ともに、条件に合わせて文章を書くことを苦手としている。また、算数では基礎・基本の確実な定着に課題があるものの、学んだことを活用する力の向上が見られた。

2 改善に向けた具体的な取組

(1) 授業づくり、指導方法の改善・充実のための重点取組

1 予習学習による児童の主体的な学びの育成

算数科の授業では、予習学習を取り入れる。スマイル学習(動画)やプリント、教科書の音読などを行うことで、児童自身が学習内容のどの部分を理解できて(できないで)いるかを明確にして授業に臨ませ、学習意欲の向上や主体的に取り組む態度の育成を図る。発表する際には、教科書に書かれている文章や資料、図などに立ち返らせ、根拠や理由を明確にし、正確な表現ができるようにしていく。

2 発展問題を取り入れた授業による数学的な見方・考え方の育成

算数科の授業では、1単位時間内に発展問題を入れる学習過程が定着しつつある。教師が児童にどのような見方・考え方を身に付けさせたいかを明確にし、授業づくりをしていく。発展問題は、単に難易度を上げるのではなく、本時で学習した解き方を活用したり、新たな解き方を導き出したりできるなど、ふさわしい問題の選定や作成に力を入れる。

3 言語活動の充実による思考力・表現力の育成

表現力を身に付けさせるために、表現する際に必要な語句や用語・話型について、発達段階に応じた『みふねの学びのことば』を活用したり、学習用語などを提示したりして、適宜指導していく。協働学習では、友だちの考えを最後まで聞くことや、分からないことを伝えることなどが確実にできるようにする。また、自分の考えを図・式・言葉などで整理・関連付けして、考えたり、表現したりすることができるように、的確に表現できた児童を賞賛したり、教師がモデルを示したりすることで表現するための技能を身に付けさせていく。授業の終わりには、授業のまとめや感想などを発表させ、学習の振り返りをさせることで、学んだことを確実にし、次時の学習への意欲を高めていく。

(2) (授業以外) 児童・生徒の課題改善のための重点取組

1 学力向上対策研修会の実施

全国学力学習状況調査、県学習状況調査、標準学力検査の結果を分析・考察し、本校の課題を明確にした。改善策について全職員で共通認識し、全学年が系統的に指導していくように共通理解を図りつつ、校内研究と連携しながら、学習習慣の定着や指導法の改善・充実に努めていく。

2 朝の(特設の)時間の充実

朝の時間の計算スキルや算数音読(算数科で学習した公式や定義などを声に出して読ませること)を継続・徹底させ、基礎的・基本的な学力の定着を図っていく。活用力や思考力、表現力の向上を図るために、学力調査の過去問等を中心に取組みせたり、問題の解説や条件つき解答の仕方の説明などを行ったりすることで解き方に慣れさせていく。

3 読書活動の推進

各学年の年間目標冊数を設定したり、家読を実施したりして読書活動を推進し、協働学習に必要な語彙力や表現力などの向上を図っていくとともに、題意等を読み取る力を付けていく。

4 家庭学習の充実

児童の発達段階に応じた家庭学習(予習学習)の内容を工夫し、保護者の協力を得ながら継続して取り組むことで、意欲の向上と習慣化を図る。

1 児童の実態

(1) 学習状況調査結果の推移

	国語			算数			理科
	5年時	6年時		5年時	6年時		6年時
		A	B		A	B	
H26 入学 現5年	61.6 (0.92)			67.9 (0.96)			
H25 入学 現6年	71.1 (1.05)	73.0 (1.02)	57.0 (1.05)	71.6 (1.01)	69.0 (1.09)	57.0 (1.11)	69.0 (1.13)
H30 正答率の全国比		(1.03)	(1.04)		(1.08)	(1.1)	(1.14)

◎5年時は佐賀県学習状況調査、6年時は全国学習状況調査の推移。

◎上段は平均正答率、下段()は、県平均を1としての比較。

◎「H30 正答率の全国比」は全国平均を1としての比較。

(2) 学習状況調査・意識調査から読み取れる実態

【国語に関して】

〈5年生〉

- ・全体として県平均を下回る結果であった。
- ・領域別では「書く」領域に関しては県平均を1.4ポイント程度上回っていたが、「話す・聞く」「読む」「知識・理解・技能」では、いずれも県平均を5ポイント以上、下回っていた。
- ・特に「読む」領域の平均が県平均よりも8.8ポイント落ち込んでおり、読解力に課題がみられた。
- ・選択・短答式の問題では県平均を下回っているものの、記述式の問題においては県平均を上回っていた。ただし、記述式の問題においては無回答率が県平均の2倍ほどに上った。このことから、記述はできる児童は全体的に多いものの、全く書けなかった児童も一定数おり、個人差が大きいことがうかがえる。

〈6年生〉

- ・全体として全国平均、県平均を上回っていた。
- ・領域別に見ても、A問題(基礎・基本)・B問題(活用)ともにほとんどの領域で良好な結果であった。
- ・全国・県平均との比較でA問題(基礎・基本)よりもB問題(活用)の結果がよかったことから、全体的に活用力は育っていることがうかがえる。

【算数に関して】

〈5年生〉

- ・全体として県平均を下回った。
- ・領域別に見ても、「知識・理解」「技能」「考え方」の三観点ともに県平均を3ポイント程度下回っており、基礎・基本的な内容理解に課題があることが分かる。

〈6年生〉

- ・全体として全国平均、県平均を上回っていた。
- ・領域別に見てもA問題(基礎・基本)・B問題(活用)ともに「数と計算」「量と測定」「図形」「数量関係」の

4観点ともに全国・県平均を上回る結果だった。このことから全体として「基礎・基本」「活用力」は良好な状態と言える。

- ・ただし、B問題(活用)は全10問中0～3問しか正答でなかった児童の割合が18%で、これに該当する児童の学力をいかに引き上げていくかが課題である。

【理科に関して】

- ・全区分、全観点で全国平均、県平均を上回っていた。
- ・問題形式が「記述式」の結果がよかったことから、知識理解だけでなく科学的な思考力もついていることが分かる。

【意識調査に関して】

〈5年生〉

- ・学校での学習時間以外の家庭学習時間が県平均と比較して少ない傾向にある。
- ・学習したことの復習をする児童の割合は高いが、分からなかったり間違えたりした問題のやり直しをしている児童の割合が低い。
- ・各教科の学習について「学習が好きだ」と答えている児童の割合は高く、学習意欲そのものは高い児童が多い。

〈6年生〉

- ・学校での学習時間以外の家庭学習時間が県平均と比較して多い傾向にある。
- ・「自分には、よいところがある」「人の役に立つ人間になりたい」と答えた児童の割合が多く、自己肯定感・自己有用感が高い傾向がうかがえ、学習意欲につながっているようだ。
- ・これまでに地域のことを調べたり、地域の人と関わったりする機会があった児童の割合が高いことも学習意欲の喚起につながっていると考えられる。

2 改善に向けた具体的な取組

(1) 授業づくり、指導方法の改善・充実のための重点取組

- ・教師が授業をする際に、教材を教えるのではなく、それぞれの教材でどんな力を身につけさせるのかを意識して授業に臨むようにする。
- ・学習の進め方で「めあて」「まとめ」「ふり返り」の流れで学習を進めることが定着している。しかし、そのとらえ方については教師と児童の意識のずれが見受けられる。そのため、特に「まとめ」「振り返り」は、教師と児童がともに作り上げていくようにする。
- ・これまでに引き続き、学び合い活動の充実を図る。自分の考えが間違っても安心して発言できるようにクラスの支持的風土を作りながら進めていく。
- ・6年生は、記述式の問題の結果が良好だったことから表現力や活用力については伸びてきていると考える。しかし、個人差が大きいことは課題である。授業の中では、自力解決を図る場面で全員が自分の考えをしっかりと持つことができるよう、特に「導入」と「見通し」に力を入れて指導の工夫を続けていく。
- ・5年生は、課題である読解力をつけるため引き続き読書活動に力を入れる。また、問題そのものに対する理解が不足しているため、問題を読み「分かっていること」「問われていること」などの関係を整理する力をつけるために、複数回読むことやどのように答えるとよいかなど基本的なパターンを教え、慣れさせるようにする。

(2) (授業以外) 児童・生徒の課題改善のための重点取組

- ・本校は、学習規律などの基礎的・基本的な事項について学校生活全般で「静」を活用した指導の研究に取り組んでいる。掃除の時間や集会活動など授業外でも「静」を意識させることで、集中して聞く習慣をつけさせ、学力向上を図る。
- ・家庭学習で毎日の宿題に出す「漢字」「計算」「音読」の提出率はおおむね良好であるので、今後は家庭学習の内容の改善を図っていく。
- ・条件作文など過去の調査問題等を活用した復習をするなど、期間を設定し集中的に取り組ませることで、条件に合わせた回答の仕方について指導する。
- ・読書に関しては、関心が高い児童が多く、今の状況を維持していく。読書の習慣がついていない児童もいるため、読書の更なる習慣化を目指していく。
- ・5年生は、家庭学習時間が県平均と比較して少ないので、子ども達にも家庭学習の大切さを伝え、家庭学習の時間を増やすように指導する。また、学級・学年懇談会や地区懇談会等、折に触れて啓発を図り、家庭・地域の協力を得るようにしていく。

1 児童の実態

(1) 学習状況調査結果の推移

	国語			算数			理科
	5年時	6年時		5年時	6年時		6年時
		A	B		A	B	
H26 入学 現5年	67.9 (1.02)			70.4 (1.00)			
H25 入学 現6年	59.2 (0.96)	77 (1.08)	76 (1.4)	66.7 (1.02)	72 (1.14)	66 (1.29)	70 (1.15)
H30 正答率の全国比		(1.09)	(1.39)		(1.13)	(1.28)	(1.16)

◎5年時は佐賀県学習状況調査、6年時は全国学習状況調査の推移。

◎上段は平均正答率、下段()は、県平均を1としての比較。

◎「H30 正答率の全国比」は全国平均を1としての比較。

(2) 学習状況調査・意識調査から読み取れる実態

1 学習状況調査の結果から

第6学年の全国学習状況調査の結果では、国語科、算数科のA問題、B問題、理科の全ての平均正答率が県平均や全国平均を上回っていた。特に、国語B問題は全国比1.39、算数B問題は全国比1.28と高い数値を示しており、既習の知識をもとに問題解決を図る活用力が高まっていると言える。無答率は極めて低く、記述式問題においても解答率が高かった。日頃の学習において、一人学びの中で自分の考えを書く活動が生かされていると言える。

設問毎に見た場合、課題が見られた問題は、国語A「主語と述語の関係に注意して正しく書く」、国語B「話し手の意図を捉え、自分の意見と比べながら考えをまとめる」、算数A「円周率をもとめる式」、「直径の長さや円周の長さの関係」、「百分率を求める」、理科「ろ過の適切な操作方法」などであった。

5年生の佐賀県学習状況調査の結果は、国語科、算数科とも県の平均正答率とほぼ同じであった。観点別に見た場合、国語科では、「語句に関する知識・理解・技能」、算数科では、「数量関係」において県よりもやや低い結果であった。

設問毎に見ると、国語科では、「目的に応じて、理由をあげて自分の考えを書く」「漢字の書き」「ことわざの意味と使い方」、算数科では、「億を超える数の十進位取り記数法」「面積についての量感」「伴って変わる2つの数量」などに課題が見られる。また、無答率が県に対して高い傾向にあり、日頃の学習の中で自分の考えが持てるよう指導を積み重ねていく必要がある。

2 意識調査の結果から

第6学年の意識調査の結果では、「自分にはよいところがある」「先生は、よいところを認めてくれる」の項目が県平均に比べ高い傾向にあった。友達や先生から承認され、自己肯定感が高いことが学習への意欲にもつながっているものと思われる。また、「毎日、朝食を食べる」「毎日同じくらいの時間に寝る、起きる」の項目も高く、規則正しい生活ができているものと思われる。

県平均に比べやや低い傾向にあった項目は、「家で自分で計画を立てて勉強をする」「授業の予習・復習をする」「平日の1日あたりの勉強時間」であった。「学校の宿題をする」の項目は高いものの、宿題のみで終わり、予習・復習や自主学習などの自分で考えて学習する時間がやや少ない結果となった。さらに読書の時間もやや少ない状況にあり、家庭学習の方法・内容について課題が見られる。

また、学習の理解は高いものの、「算数の勉強が好き」や「算数の学習を生活の中で活用する」、「理科の学習を生活の中で活用する」「将来、理科や科学技術に関する職業につきたい」など、学習を生活の中に生かしていこうとする意欲・態度が今一步であった。

2 改善に向けた具体的な取組

(1) 授業づくり、指導方法の改善・充実のための重点取組

- 1 「西部型授業」を基本にしながら、主体的な問題解決学習に取り組みさせる。
①「めあて」の提示 ②自力解決 ③話し合い活動（グループや全体）④「まとめ・振り返り」
学習過程のプレートを使いながら「西部型授業」の流れにそって、授業作りを行う。ただし、目的や内容によって時間の配分は工夫をする。
- 2 自分の考えを持たせるため、いろんな教科の中で書く活動を積極的に取り入れていく。また、書いたことを発表に生かしながらグループや全体の場での協働的な学習を充実させたい。
- 3 学習と生活の関連を意識させたり、深めさせたりするために、生活場面の中から学習問題を取り上げたり、学習したことを生活に生かしたりする活動（物作りや発展課題）について工夫していきたい。
また、総合的な学習の中で、いろいろな教科で培った知識・技能を意図的、計画的に活用させる。調べたことをまとめる際には要約をしたり、グラフや図表を活用させたりして教科の有用感を高めさせたい。

(2) (授業以外) 児童・生徒の課題改善のための重点取組

- 1 パワーアップ課題
活用力育成のために、発展的な問題や活用問題を週末の家庭学習の課題とする。(4・5・6年)
1回に1問程度を課題とし、しっかり考えさせる。その後、解き方や答え方について丁寧に指導する。
- 2 若木小学校作成の「家庭学習の手引」について職員で見直し、学年に応じた家庭学習の時間設定や課題の内容についての共通理解を図る。また、自主学習のやり方のヒントを示し、週に1回程度自主学習にも取り組ませたい。
- 3 家庭での読書を奨励し、読書も家庭学習の1つとして位置づける。月に1回の「家読」の時間の充実を図り、家庭と連携し親子での読書活動に取り組みたい。

1 児童の実態

(1) 学習状況調査結果の推移

	国語			算数			理科
	5年時	6年時		5年時	6年時		6年時
		A	B		A	B	
H26 入学 現5年	66.8 (1.00)			70.8 (1.00)			
H25 入学 現6年	70.1 (1.14)	76 (1.07)	59 (1.09)	73.8 (1.13)	63 (1.00)	58 (1.14)	67 (1.10)
H30 正答率の全国比		(1.07)	(1.08)		(1.00)	(1.13)	(1.11)

◎5年時は佐賀県学習状況調査、6年時は全国学習状況調査の推移。

◎上段は平均正答率、下段()は、県平均を1としての比較。

◎「H30正答率の全国比」は全国平均を1としての比較。

(2) 学習状況調査・意識調査から読み取れる実態

○5年は、国語、算数とも県平均とほぼ同じである。国語においては、書く領域は県平均よりも8%正答率が高く、指導の成果が表れている。一方、読む領域は、県平均よりも7%正答率が低く「おおむね達成」に達していない。特に長文の読み取りや漢字の読みに課題が残った。本文や問いの文章を理解できていないのではと推察する。算数においては、量と測定の領域に課題が残った。文章を読み取って、得た情報を活用する問題ができていない。一方で計算技能は十分達成レベルに達しており、また、図形における点の位置関係の問題の正答率は9割と高く、花まるタイムの効果だと考えられる。

○6年は、国語、算数、理科とも全国平均を大きく上回り、良好な結果である。無回答率もほぼ全国平均よりもかなり低く、前向きに取り組もうとする意欲の表れだと考える。国語においては、領域別に見ると、A・Bともに「話すこと・聞くこと」「書くこと」が全国平均よりもかなり高い。特に話し合いにおける質問の目的や意見の述べ方について理解し、正答率も十分達成のレベルである。課題としてあげるならば、主語述語の関係に注意して書く問題が全国平均より低いので、授業で言語や文法の選択問題に取り組む必要がある。算数においては、Aは全国平均とほぼ同じであったが、Bは全領域で全国平均を上回る良い成績であった。日ごろの授業の取組はもちろんだが、論理的思考を培うなぞペー授業の効果も伺える。特にA、Bともに図形や空間認知が問われる問題において正答率が高かった。日々の花まるタイムでの積み木遊び等の図形訓練の成果が伺える。課題としてあげるならば、B問題で棒グラフと帯グラフから分かることを読み取る問題や示された数量を関連づけ、根拠を明確にして説明する問題は全国平均を下回り、課題が見られる。理科においては土や石を積もらせる水の働きを問う問題は100%の正解率など知識を問う問題は全国平均よりもかなり高い。科学的思考や概念が身に付いている。一方、知識を模型や理科における「ものづくり」などに適用することに課題が見られる。

○意識調査では、5・6年ともに、将来の夢や目標をもってる児童は90%以上、読書に日頃から親しんでいる児童も県平均より10%以上高い。生きる力や生涯学習につながる意欲醸成の高まりが感じられる。また、地域の行事に参加している児童も全国平均より10%高く、6年生にいたっては、地域や社会に起こっている問題に関心がある子は全国平均より30%多い。日頃から地域の方が学校教育に多く関わっていただいている成果があらわれている。

2 改善に向けた具体的な取組

(1) 授業づくり、指導方法の改善・充実のための重点取組

- 1 「主体的・対話的で深い学び」を実現するために全ての教科領域において、1時間の授業の中で児童にどんな力をつけなければならないのか指導目標を明確にする。児童が意欲的に学習にのぞむ姿勢をもたせるために、児童とつくり上げる「めあて」や「まとめ」の設定を意識した授業づくりを全職員で取り組む。
- 2 協働的学びにつながる「友だちタイム」において、以下の点を強化する。
 - ・自分の意見をはっきり言えるためには、情報を集め、根拠をはっきりさせる力が必要になってくる。問題の中に図や表があれば、それに、分かっている数字を書き込むなど、情報を収集するこつや分かったことや考えたことをノートに整理して書く力を育成することを意識して、授業に臨むようにする。
 - ・児童が思わず話し合いたくなるような学習課題の設定を工夫する。
 - ・論点がずれないように、何のために話し合っているのか、時々「めあて」に戻ることも意識する。
- 3 算数は単元によって、習熟度別に授業を行ったり、TT体制で行ったりすることで、一人一人の理解に応じたきめ細かな指導ができるようにする。
- 4 授業の終わりにふり返りの時間を設定し、自分の学びの深化や他者との協働的学びのよさなどに気付かせる。

(2) (授業以外) 児童・生徒の課題改善のための重点取組

- 1 意識調査より昨年度よりも一日に30分以上読書をしている児童が28%増えている。始業前の朝読書に取り組んでいる成果である。しかし、読む本の種類によっては物語をあまり読まない傾向にあるので、国語の読解力を付けさせるためにも「おすすめの本」を紹介するなどして物語にも興味をもつよう工夫していく。
- 2 朝の花まるタイム(計算力・空間認知力)や思考力を培うなぞペー授業の効果(算数Bの向上)も伺えた。さらに、コトカン(慣用句・ことわざ)音読では、意味まで読むなどして内容まで理解させる。
- 3 家庭学習については、全職員で共通理解を図り、発達段階に応じた学習時間を確保させる。内容や量については、ICT機器やドリル、プリント等を活用し、個別に補充指導をとりながら、基礎的・基本的な知識の定着を図る。調査の設問別到達状況において習得できていない内容や児童が苦手としている内容についても、日頃から繰り返し復習させていく。

また、現在取り組んでいる思考力向上をねらった週末課題については、基礎・基本の復習問題を加えたり児童の考えた問題を取り上げたりするなど、内容の改善を図り、発展的な学習と基礎・基本の両面からの習得をねらった取り組みを実施する。
- 4 家庭学習強化週間を年3回設定し、自主学習の良い例と家庭学習に意欲的に取り組んだ児童を紹介することで自主学習を推進していく。高学年は、計画を立てて自主学習に取り組ませるなど、タイムマネジメントを視野においた指導をしていく。
- 5 児童に、今回の調査結果に見られる成果と課題を知らせ、学力向上に向けて、今後どんなことに気をつけて学習に取り組めばよいか、自分の言葉で振り返りをさせる。
- 6 地域の行事に参加している児童も全国平均より10%高く、6年生にいたっては、地域や社会に起こっている問題に関心がある子は全国平均より30%多いことから、家庭や地域の方のこれまでの学校教育への協力の賜である。今度は、今ある行事の範囲内で、地域の方に貢献できることを何かしていこうという取り組みをすることで、達成感を高める。全校朝会や保護者会などでも、このような良いところも紹介することで、児童の自己肯定感や保護者の意識をよりを高めていく。

1 児童の実態

(1) 学習状況調査結果の推移

	国語			算数			理科
	5年時	6年時		5年時	6年時		6年時
		A	B		A	B	
H26 入学 現 5年	63.9 (0.96)			66.0 (0.93)			
H25 入学 現 6年	64 (1.04)	71 (1.00)	53 (0.98)	78 (1.19)	62 (0.98)	57 (1.12)	65 (1.07)
H30 正答率の全国比		(1.00)	(0.97)		(0.98)	(1.11)	(1.08)

◎5年時は佐賀県学習状況調査、6年時は全国学習状況調査の推移。

◎上段は平均正答率、下段()は、県平均を1としての比較。

◎「H30正答率の全国比」は全国平均を1としての比較。

(2) 学習状況調査・意識調査から読み取れる実態

○学習状況調査より

- ・5年生の正答率は、国語「知識・理解・技能」、算数「技能」が県平均と同等である。一方、国語「読む」・「話す・聞く」、算数「考え方」は、県平均を下回った。詳しく内容を見ると、「漢字の読み・書き」や算数「図形」が県平均を上回っているが、国語「読む」、算数「数と計算」、「量と測定」、「数量関係」が県平均を下回っている。
- ・6年生の正答率は、国語、算数、理科とも県平均及び全国平均とほぼ同等である。特に、国語「書く」、理科「技能」は大きく上回っている。やや課題が見られた観点は、国語「語句に関する知識」である。
- ・上記のことより、漢字や計算など継続的に努力を要するものは、5、6年生ともに県平均同等もしくはそれ以上である。一方、応用問題については苦手としている児童が多い傾向が見られる。

○児童質問紙より

- ・以下の項目は、5、6学年とも県平均より上回った主な質問紙である。 ※()内は、県平均
「学校の授業時間以外に普段(月曜日から金曜日)、1日当たりどれくらいの時間、勉強をしますか。」で1時間以上学習している児童は、5年 66.7%(60.8%)、6年 71.4%(64.2%)である。
「学級の友達との間で話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思う。」では、5年 76.2%(71.1%)、6年 78.5%(76.6%)である。
「今住んでいる地域の行事に参加している。」では、5年 95.3%(75.4%)、6年 100%(72.2%)である。
- ・以下の項目は、5、6学年とも県平均より下回った主な質問紙である。 ※()内は、県平均
「理科の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つ。」で、5年 76.2%(85.8%)、6年 57.2%(72.5%)である。
「算数の授業で学習したことを普段の生活の中で活用できないかを考える。」で、5年 66.6%(75.4%)、6年 57.2%(66.9%)である。
- ・上記より、家庭での学習時間や地域への参加状況は、保護者や地域の方々の協力もあり県平均を上回ることができている。しかし、授業中に学習したことを日常生活に活かしたり、学習する意味を理解したりしている児童が少ない。授業中の話し合い活動等を通して、児童自身が意見を出し合いお互いを高め合う状況を作り出すことで、魅力ある授業作りと主体的、対話的で深い学びにつながる指導法に努めていきたい。

2 改善に向けた具体的な取組

(1) 授業づくり、指導方法の改善・充実のための重点取組

1 全学年で縦のつながりを重視した指導法

- ・西部型指導法(めあて→一人学び→みんなで学び→まとめ→ふりかえり)を全学年、全教科で実施し、児童が学びやすい学習スタイルに取り組む。
- ・語い力を高めるために意味調べや熟語調べの時間を確保する。
- ・校内研究の研究主題である「自分の考えをもち、豊かに学び合う児童の育成」をもとに、授業中のペアやグループでの話し合い活動の充実に努める。

2 児童の表現活動を重視した指導法

- ・ICT等を活用して、自分の意見を表現する場の設定に努める。
- ・児童が自分の考えを表現する手立てとして、話型を用いて、式・文・図・学習用語を使った説明の仕方を指導していく。

3 教科における具体的な指導法

- ・授業中に書く活動を設ける。具体的には、1単位時間をまとめる活動の時に、学習用語やキーワードを活用したり字数制限をしたりして、まとめさせる活動を仕組む。
- ・「読む力」を付けるためにあらすじや段落間のつながりを授業の中で丁寧に取り扱う。
- ・文章題のキーワードや数字同士の関係性に着目させて、式を立てさせる。

(2) (授業以外) 児童・生徒の課題改善のための重点取組

1 学力向上対策研修会の実施

- ・夏季休業中に、全国学力調査・県学習状況調査・標準学力検査の結果分析から本校の課題を見つける研修会を行った。その後、改善策について話し合いをもち、全職員で以下のことを共通理解した。
- ① 朝の読書時間やおすすめの本への取組を活用して、読書量を増やしていく。また、読書後の感想タイムを入れることで、読書の幅を拓げていく。
- ② ローマ字の習得は、国語科に限らず、タブレット使用時に随時指導して定着を図る。
- ③ 算数科の学習で特に苦手な領域がある児童については、個別指導を放課後等で行う。
- ④ 学習状況調査の過去問に取り組む、解き方や問題構成に慣れさせる。また、教師自身も出題意図や授業に取り入れるための手立てを考える機会とし、教師の指導法改善につなげていく。
- ⑤ QUTテスト結果の分析を職員研修で行い、協働的な学習につながる学級づくりをする。

2 家庭学習の充実

- ・家庭学習についてマンネリ化の克服と習慣化の推進を目指し、魅力ある宿題にするために、内容や方法を検討した。漢字や音読は常時の取り組みとし、新たに条件付き日記や作文や算数の文章問題プリントにも適宜取り組ませる。
- ・生活アンケートを生かした家庭での生活リズムを見直す家庭内ルールを保護者と連携して推進していく。

3 補充指導

- ・朝の時間や放課後に、漢字の小テストをしていくことで、定着を図る。
- ・サマースクールや放課後指導など能力に応じた個別指導を行っていく。

1 児童の実態

(1) 学習状況調査結果の推移

	国語			算数			理科
	5年時	6年時		5年時	6年時		6年時
		A	B		A	B	
H26 入学 現 5年	73.6 (1.11)			74.5 (1.06)			
H25 入学 現 6年	46.4 (0.75)	56 (0.78)	28 (0.52)	52.3 (0.8)	52 (0.83)	38 (0.75)	50 (0.82)
H30 正答率の全国比		(0.79)	(0.51)		(0.82)	(0.74)	(0.83)

◎5年時は佐賀県学習状況調査、6年時は全国学習状況調査の推移。

◎上段は平均正答率、下段()は、県平均を1としての比較。

◎「H30正答率の全国比」は全国平均を1としての比較。

(2) 学習状況調査・意識調査から読み取れる実態

- ・6年生は、3教科とも県・国の平均正答率を下回った。
- ・国語のB問題では、0.52と県を大きく下回っている。
- ・問題文が難しくなると、内容をきちんと読み取ることができず、必要な情報を整理できていない。
- ・記述問題や活用問題ができていない。
- ・5年生は、国語、算数ともに、県の平均を上回った。
- ・家庭で2時間以上家庭学習をしている児童の割合が、県や国と比べて少ない。
- ・普段1時間以上の読書をしている児童の割合は、国や県と比較して多い。

2 改善に向けた具体的な取組

(1) 授業づくり、指導方法の改善・充実のための重点取組

(1) 問題文の内容をきちんと読み取る力をつける。

- ・問題文が長いもの、グラフや表を読み取って答えるものなど、多くの類題に挑戦させる。
- ・学年に応じた内容の本や、長い物語の本などを読ませ、根気強く文章を読み取る力をつける。
- ・問題文に線を引かせたり、必要な情報を書き込んだりさせることにより、問われている内容を整理し、確実に理解させる。

(2) 活用力を問う問題や、記述式の問題を解く力をつける。

- ・すべての学年で、活用力をつける問題に挑戦する時間を設定(2週間に1時間)し、難しい問題にじっくり取り組ませる。
- ・問題の解き方や説明を文章で記述する学習を授業の中に多く取り入れ、自分の考えを順序良く整理して書く力をつける。
- ・学習内容に応じて、多くの問題に挑戦する時間や応用問題に挑戦する時間を設け、メリハリのある授業を工夫する。

(3) 学習課題や発問を工夫し、思考・判断させる授業を目指す。

(2) (授業以外) 児童・生徒の課題改善のための重点取組

(1) 家庭と協力しながら、家庭学習の充実に取り組む。

- ・家庭での学習時間や学習内容を調べ、現状を保護者に伝えながら協力を得る。
- ・「学力向上だより」を発行し、学力向上のための、学校と保護者との情報交換を行う。

(2) 花まるタイムを活用して、基礎的な計算力や図形の力、語彙力などをつけていく。

1 児童の実態

(1) 学習状況調査結果の推移

	国語			算数			理科
	5年時	6年時		5年時	6年時		6年時
		A	B		A	B	
H26 入学	78.4			79.2			
現 5年	(1.18)			(1.12)			
H25 入学	57.0	68	46	64.0	53	44	58
現 6年	(0.93)	(0.96)	(0.85)	(0.98)	(0.84)	(0.86)	(0.95)
H30 正答率の全国比		(0.96)	(0.84)		(0.83)	(0.85)	(0.96)

◎5年時は佐賀県学習状況調査、6年時は全国学習状況調査の推移。

◎上段は平均正答率、下段()は、県平均を1としての比較。

◎「H30正答率の全国比」は全国平均を1としての比較。

(2) 学習状況調査・意識調査から読み取れる実態

【学習状況調査】

- ・国語科では「漢字を正しく書く」「主語と述語との関係に注意して文を正しく書く」「文章全体の内容と構成を捉える」ことの正答率が低い。漢字の書き取りの繰り返し学習など、基礎基本の学習が必要とされる。また、与えられた資料などの内容を正しく読み取らせ、指定された文字数など条件に合った作文作りに取り組みさせるなど指導が必要である。
- ・算数科では「図や表を基に伴って変わる2つの数量の関係を調べる」「考えを式や言葉を使って説明する」「面積の大きさの感覚を理解している」ことの正答率が低い。図や表から、2つの数量がどのように変化しているかを読み取る方法を指導する。また、数量の変化など示された情報を基に式や言葉を使って説明する練習に取り組みさせる。面積を求めることについては、対象物について始めに見通しをもたせ、大まかな予想を立てさせるなど量感を身に付けることができるように指導方法を工夫していく。
- ・理科では「強い水の流れにより地面の削られ方が違うこと」「物を水に溶かしても全体の重さはかわらないこと」ことの正答率が低い。水の流れ方と地面の削られ方の関係を理解させること、また、食塩水の全体の重さは、水と食塩の重さを合わせたものであることは、実験結果を考察することを通して理解させるようにする。

【意識調査】

- ・国語科では「自分の考えを書くとき、考えの理由が分かるように気を付けている」と回答した児童の割合が高い。今後も、考えと理由付けを関連させながら学習を進めていくようにする。しかし、「目的に応じて資料を読み、自分の考えを話したり、書いたりする」と回答した児童の割合は低い。与えられた資料などの内容を正しく読み取らせ、わかったこと、自分と同じような考えや違った考えなど比べさせるような

指導もおこなっていく。

- ・算数科では「問題を解くとき、もっと簡単に解く方法がないか考える」と回答した児童の割合は高い。しかし、「公式や決まりを習うとき、そのわけを理解するようにしている」と回答した児童の割合は低い。今後も、問題の意味をしっかりと理解させ、求め方について速く簡単に正確に解く方法を考えさせるなど、いろいろな考え方について考えさせていくようにする。
- ・理科では「自分の考えをまわりの人に説明したり発表したりしている」と回答した児童の割合は高い。友達と学び合う時間をこれからも設定していくようにする。しかし、「学習したことを普段の生活に生かせないか考えたり、学習したことが生かされているものを、身の回りから見つけたりしている」と回答した児童の割合は低い。学習した内容が身の回りの生活で使われ役立っているものを示したり見つけさせたりする活動を取り入れ、生活と結びついていることを理解させるようにしていく。

2 改善に向けた具体的な取組

(1) 授業づくり、指導方法の改善・充実のための重点取組

- ・授業では自分の考えを表現する場を設定し、話し合いの深まりや広がりが見られる手立てを工夫する。また、一人一人に、自分の言葉で「まとめる」ができるように、書く活動の時間を確保し、書かせる指導に取り組ませる。
- ・授業の始まり、終わり方を全学級統一し、授業の振り返りをさせるなど共通理解を図る。
- ・タブレット、電子黒板など ICT を効果的に活用することにより、主体的・対話的な授業づくりに取り組むようにする。

(2) (授業以外) 児童・生徒の課題改善のための重点取組

- ・学習に集中して取り組めるような環境を整備するために、筆箱、下敷きなど筆記用具について、低・中・高学年ごとに「学習用具の約束」を家庭向けに発行し、家庭と学校との連携を図る。
- ・学年の発達段階に応じた自主学習の「メニュー」や「内容のまとめ方のルール」の手引きを示したり、家庭には「家庭学習の協力」についての便りを配布したりして家庭学習の習慣を身につけさせる。
- ・朝の時間の「花まるタイム」では音読、図形、計算、視写の指導を週4日を基本とし、テンポやリズムをつけ、集中力を高めるような指導を継続していく。

1 児童の実態

(1) 学習状況調査結果の推移

	国語			算数			理科
	5年時	6年時		5年時	6年時		6年時
		A	B		A	B	
H26 入学 現 5年	70.9 (0.86)			68.0 (0.84)			
H25 入学 現 6年	61.9 (1.01)	71 (1.00)	50 (0.92)	67.4 (1.03)	64 (1.01)	51 (1.00)	62 (1.01)
H30 正答率の全国比		(1.00)	(0.91)		(1.00)	(0.99)	(1.02)

◎5年時は佐賀県学習状況調査、6年時は全国学習状況調査の推移。

◎上段は平均正答率、下段()は、県平均を1としての比較。

◎「H30正答率の全国比」は全国平均を1としての比較。

(2) 学習状況調査・意識調査から読み取れる実態

【学習状況調査】

- ・国語科では、「漢字」は読み書きともに、ほぼ習得できている。
- ・国語科では、「書くこと」の領域に課題が残り、自分の考えを説明したり、条件に合わせて文章を書いたりすることが苦手である。
- ・算数科では「技能」の領域はよく身につけているが、活用問題の正答率が低く、問題文の情報を整理し、文意を理解することが不十分であることが課題である。
- ・理科では、実体験や視覚的情報を整理する能力は身につけており、比較する能力も身につけているが、活用問題の正答率が低く、状況をイメージしたり、憶測し、見通しをもつ力が不十分であるところに課題が残る。

【意識調査】

- ・「自分にはよいところがあると思えない」児童、「先生は自分のよさを認めてくれていると思えない」児童が、ともに15.9%いて、県や全国平均に比べやや高い。また、「将来の夢や目標を持っていない」児童が29.5%と県や全国平均に比べ2倍ほど高くなっている。
- ・「いじめはどんな理由があってもいけない」と思っている児童、「人の役に立ちたい」と思っている児童は、ともに100%であった。
- ・基本的な生活習慣（「早寝・早起き・朝ごはん」など）は、大半の児童が定着している。就寝時刻が毎日同じではない児童が29.6%で、県や全国平均に比べ高い。
- ・家庭学習については、計画を立てて、宿題や予習、復習に取り組んでいる児童の割合は、県や全国平均よりも高い。平日の学習時間が1時間以下という児童が15.9%いて課題が残るが、県や全国平均に比べると低い。
- ・週末に「家で勉強や読書をしている」児童が65.9%、「家でテレビ・ゲーム・インターネットをしている」児童が90.9%と高く、「家で家族と過ごしている」児童は84.1%と、県や全国平均よりも高い。
- ・「地域の行事に参加する」児童が88.7%と多い。

2 改善に向けた具体的な取組

(1) 授業づくり、指導方法の改善・充実のための重点取組

- 「めあて」や「まとめ」の提示、「ふりかえり」の設定など、全校で共通した学習過程を取り入れ、指導方法を改善する。
 - ・「授業づくりのステップ1・2・3 vol.1」及び「授業づくりのステップ1・2・3 vol.2」を活用し、「めあて」「まとめ」「書く活動」「話し合う活動」「ふりかえり」の5つを意識した授業を継続して実践し、児童の学力向上に努める。
 - ・問題文を読んで、問題場面を具体的にイメージすることが不十分である。具体的には、何を問われているのかを的確にとらえさせるために、文章問題に線やしるしを書き入れたり、図に表したりすることを全学年で取り入れる。授業の中で繰り返し指導し定着させる。

- 自分で考えたことをノートなどに書かせる活動や、考えたことなどについて話し合わせる活動を授業場面で設定する。
 - ・条件を与えて文章を書く、振り返りを書く、まとめを書く活動を、授業の中に多く取り入れる。
 - ・全ての教科において、「条件を設定されたなかで自分の考えを書く」活動を、意図的、計画的に授業に取り入れる。
 - ・話し合い活動では、友だちの考えを聞いて交流したくなるような、課題を設定する。また、提示の仕方を工夫し、比較したり、関連付けたりしながら自分の考えを発表できる授業づくりを行う。

(2) (授業以外) 児童・生徒の課題改善のための重点取組

- 家庭学習の充実を図り、児童によりよい生活習慣や学習習慣を身につけさせる。
 - ・家庭学習ノート(自主学習)の点検を級外が担当し、毎日継続することができているので、今後も全職員でサポートを継続する。
 - ・「学校だより」「八束穂」(学習部だより)を定期的に発行し、地域や保護者との連携を図る。また、児童の家庭学習ノートを紹介し、保護者への啓発、家庭学習の充実を図る。
 - ・各学年で家庭学習時間を設定し、生活チェックや学習時間やテレビ・ゲーム等の時間の記録を書いた「やまびこカード」の振り返りを通して、家庭学習の定着を図る。
 - ・誤答の多かった問題に対し、児童が苦手意識を軽減するよう、授業や宿題等で取り上げ取り組ませる。

- 地域人材を活用した学習を進め、「ふるさと山内」を愛し、自分に関わる人を大切にする児童を育てる。
 - ・週3回の「花まるタイム」(朝の15分間)では、花まるサポートとして、地域の方々や保護者に学習支援をしていただいている。児童一人一人に声をかけながら、花まるをつけ、児童に関わりをもってもらい、地域や保護者に認められる機会を多くとることで、児童の自己肯定感を高める。
 - ・地域で活躍する団体や人材を、各教科の学習等でゲストティチャーとして招き、様々な体験学習をしたり、授業支援サポートをしてもらったりしながら、専門的知識や技能に触れ、豊かな情操を培う(黒髪大学、婦人会など)。

1 児童の実態

(1) 学習状況調査結果の推移

	国語			算数			理科
	5年時	6年時		5年時	6年時		6年時
		A	B		A	B	
H26 入学 現5年	73.8 (1.11)			76.5 (1.08)			
H25 入学 現6年	59.5 (0.97)	70 (0.99)	55 (1.02)	60.0 (0.92)	64 (1.02)	51 (1.00)	63 (1.03)
H30 正答率の全国比		(0.99)	(1.01)		(1.01)	(0.99)	(1.04)

◎5年時は佐賀県学習状況調査，6年時は全国学習状況調査の推移。

◎上段は平均正答率，下段()は，県平均を1としての比較。

◎「H30正答率の全国比」は全国平均を1としての比較。

(2) 学習状況調査・意識調査から読み取れる実態

【現5年生】

■国語，算数ともに県平均を上回り，良好な状況である。4年時12月調査より正答率が高まっていることから，日々の取組が学力の確実な定着につながっていることがわかる。

《国語》

○特に「漢字の読み・書き」「ことわざ」「国語辞典の使い方」「ローマ字」などに関しては，日頃から授業や生活の中で触れる機会が多く，自主学習でも意欲的に取り組んでいる児童が多いため，正答率が高い。
▽文章の内容を踏まえ，適切に引用したり，目的に応じて文章を要約したりすることに課題が見られる。文末表現や中心となる言葉（キーワード）に着目した読み方を身に付けさせる必要がある。

《算数》

○特に「技能」は，「十分達成」のレベルにあり（84.1%），基礎・基本の習得ができています。
立方体の展開図においては，100%の正答率であり，分度器を用いた角を求める設問も，94.9%と高い。
▽示された図を基に，伴って変わる二つの数量関係を捉えることができていない。示された図（問題）に考え方を書き込んだり，考えの道筋を表現したりする力を身に付けさせる必要がある。

【現6年生】

■国語，算数，理科ともに，県平均，全国平均並みの結果であった。昨年度と比べて伸びが見られることから，授業や「やる気タイム」の成果が表れている。国語は，B問題が県，全国を上回っていることから，活用問題にも積極的に取り組んだ成果が見られる。全授業において「書く活動」を意識的に取り入れてきたことも結果につながっていると考えられる。

《国語》

○5年時4月調査では県平均を下回っていた「読むこと」がA問題B問題とも県及び全国平均を上回っている。（A問題 県4.1↑全国2.2↑，B問題 県7.2↑全国7.5↑）
▽観点別にみると，A問題の「話す・聞く」「書く」「言語についての知識・理解・技能」は県及び全国平均を下回った。目的に応じて，複数の資料から必要な内容を取り上げて文章にまとめることに課題が見られる。主語と述語の関係や形式段落の中の文のはたらきの理解にも課題が見られる。

《算数》

○5年時4月調査では県平均を6.3ポイント下回っていた「数量関係」が，今年度はA問題で4.3ポイント，B問題で4.5ポイント上回っている。
▽観点別にみると，県及び全国平均との開きが大きかったのは，B問題の「数量や図形についての知識・理解」であった（県及び全国7.4↓）。前提場面や与えられた資料を活用して解くことができていない。立式の根拠や求めた数値が何を表しているのか説明する力を身に付けさせる必要がある。

《理科》

- 特にA区分の「エネルギー」は、県平均を10ポイント近く上回ることができている。
- 「主として『活用』に関する問題」は県平均を3ポイント（全国平均は2.8）上回っている。
- ▽観点別にみると、県及び全国平均を下回っているのは「観察・実験の技能」であった（県4.9↓、全国4.4↓）。学習で得た知識と観察・実験の結果から言えることを比較して表現することに課題が見られる。

【意識調査（5、6年）】

- ◇家庭学習については、5・6年共に全児童が「宿題をしている」と答えている。学習時間については、「1日当たり1時間以上」と答えた児童は、5年生75.7%（県60.8%）、6年生88.6%（県64.2%）と県平均を上回っており、学習習慣が定着してきている。しかし、「授業の予習（復習）」を「している」と答えた児童は5年生39.1%（県48.4%）、6年生54.5%（県60.1%）と県平均を下回っている。宿題だけでなく自主学習にも取り組むことができるよう、主体的に学ぶ意欲を高めていく必要がある。
- ◇テレビやビデオ、DVDの視聴については（5年生のみ調査）、「1日当たり2時間以上」と答えた児童が60.9%（県52.1%）であった。6年生も、放課後、テレビ視聴やゲームの時間の割合が高いことから、平日の家庭での過ごし方を見直す必要がある。
- ◇地域行事への参加率は、県に比べて高く（5年生92.7%、6年生72.7%）、地域とのつながりも深い。「人の役に立つ人間になりたい」と答えた児童も5年生95.1%、6年生100%と非常に高い。

2 改善に向けた具体的な取組

(1) 授業づくり、指導方法の改善・充実のための重点取組

①基礎基本の習得のための工夫

- ・「授業づくりのステップ 1・2・3 Vol1」や授業改善チェックリストを活用し、ステップ3を目指して授業づくりを行う。「話し合う活動」については、「Vol2」を参考にし、ステップ3を目指す。
- ・児童の主体的な活動による学習活動を保障し（教師が説明しすぎない）、45分で授業が完結するようにタイムマネジメントに留意する。【教師のタイムマネジメント力の向上】
- ・「何を問われているのか」、「着目する点はどこか」、「図、式、ことばの関連」、「文と文のつながり」などがわかるように、問題やノートに書き込む指導を行う。【書き込み指導の徹底】
- ・複数の情報の中から必要な情報を選んで書いたり、解いたりする問題設定や言語活動を仕組む。【資料を読み取る力の向上】

②思考力・判断力・表現力を高める工夫

- ・学ぶ意欲や知的好奇心を高める問題提示を工夫する。【主体的な学びの実現】
- ・複数の考えを比較・分類させながら整理したり、さらに学びを深めるための観点を示したりしながら児童の考えを広げ深める学び合いを展開する。【対話的な学びの実現】
- ・習得した知識・技能を活用させる場や、学習と生活との関連を図る場を位置付けた単元構成や授業構成を仕組む。【深い学びの実現】

③望ましい学習習慣・態度の育成の工夫

- ・立腰教育を基盤にして学習規律の定着を図り、気持ちのよい「返事」「挨拶」「言葉遣い」「話を聴く姿勢」を全職員で徹底させる。【学びの土台づくり】

(2)（授業以外）児童・生徒の課題改善のための重点取組

- ・朝の時間は、（月）音読タイム、（火・木・金）「花まるタイム」の目的や実施内容を共通理解し、実施状況を情報交換することによって、基礎的な学力が向上するように改善を加えていく。【朝の時間の充実】
- ・学力向上強化月間（7・8月、11月、2月の「やる気タイム」）では、保護者や地域の方に学習ボランティアとして丸つけに来ていただくことで、児童の意欲をさらに高め、個別指導の充実を図る。また、内容を工夫し、習熟を図ったり、活用問題に取り組んだりする。【やる気タイムの充実】
- ・主体的に学ぶ力を育てるために、全校で自主学習に取り組む（3年生以上週に1回全校自主学習日の設定）。新聞の活用、テーマや条件を設定した日記、授業を振り返って自分の考えを書く活動など学年に応じた自主学習課題を提示し、活用力の向上を図る。【自主学習（宿題）の内容の工夫】
- ・「学力向上だより」を通じて、学校の取組や児童の学びの姿、学力向上に対する情報を家庭や地域に提供し、情報を共有することで、家庭・地域とともに児童のよりよい生活・学習習慣づくりに努める。
【家庭・地域との連携・協働】
- ・教員同士が指導法について学び合ったり、教材研究をしたりする時間として「先生やる気タイム」「模擬授業研修」を確保し、指導力の向上を図る。【教員相互の学び合いの充実】

1 児童の実態

(1) 学習状況調査結果の推移

	国語			算数			理科
	5年時	6年時		5年時	6年時		6年時
		A	B		A	B	
H26 入学	68.0			74.0			
現 5年	(1.02)			(1.04)			
H25 入学	59.4	70.0	50.0	63.9	63.0	46.0	59.0
現 6年	(0.97)	(0.99)	(0.93)	(0.98)	(1.00)	(0.90)	(0.97)
H30 正答率の全国比		(0.99)	(0.91)		(0.99)	(0.89)	(0.98)

◎5年時は佐賀県学習状況調査、6年時は全国学習状況調査の推移。

◎上段は平均正答率、下段()は、県平均を1としての比較。

◎「H30正答率の全国比」は全国平均を1としての比較。

(2) 学習状況調査・意識調査から読み取れる実態

【現5年】

- ・国語、算数ともに県平均と同等の状況である。4年時12月調査では、算数に課題が見られたものの、徐々に改善されてきていると考えられる。日々の取組が学力の定着につながっている。

国語について

- ・「漢字の読み・書き」や「ローマ字」などに関しては、正答率が高い。日々の授業での取り扱いを丁寧に行ったこと、繰り返しの指導を行ったことの結果が表れている。
- ・文章の内容を踏まえ、与えられたものから適切に引用をしたり、条件に応じて要約したりすることに課題が見られる。無解答率が低いことから、何とか答えようとする姿勢は見られる。しかし、文章に過不足があることで、正答に至っていない。求められていることを適切に選ぶことができるように、中心となる言葉に着目した読み方ができるような指導を、授業の中で行う必要がある。

算数について

- ・観点別にみると、「技能」に関しては正答率83.9%で「十分達成」のレベルにある。習熟の時間を確保するだけでなく、補充の時間を設定し、学校全体として取り組んできたことの結果と言える。「考え方」「知識・理解」についても、全体的にみると「おおむね達成」のレベルを越えている。
- ・長さや重さ、面積に対する量感がつかめていない。学習した内容と生活を結びつける活動を設定したり、他教科との関連付けを行ったりしながら、学習したことを生かす力を身に付けさせる必要がある。

【現6年】

- ・国語、算数ともに県平均と同等の状況である。昨年度と比べて大きな変化は見られない。

国語について

- ・A問題については、正答率70%と県平均と同等の結果である。特に、漢字については、文の中で正しく使うことができている。県および全国平均を5~7ポイント上回っている。
- ・敬語の使い方に課題が見られ、相手や場面に応じて適切に言葉を選ぶことができない。
- ・B問題については、県および全国平均を4ポイントほど下回っている。特に「書くこと」について落ち込みが見られる。話し手の意図をつかみ、自分の意見と比較しながら考えをまとめることが難しい。登場人物の気持ちと自分の考えを比べながら物語を読んだり、説明文の中で筆者の主張に対する自分の考えをまとめたりする学習活動が必要である。

算数について

- ・国語同様、A問題については県および全国平均と同等の結果である。「数量関係」については、県平均と比べて6.4ポイント、全国平均と比べて3ポイント上回っている。
- ・「数と計算」に課題が見られ、与えられた数量の関係を数直線上に表す問題では、県・全国平均を10ポイント以上下回った。
- ・B問題については、県および全国平均を5ポイントほど下回っている。問題の意図をつかむことに加え、数量を関連付け根拠を明確にしながらか述しなくてはならないところに苦手意識があると考えら

れる。記述式で答える問題に関しては、無解答率が高くなっている。

理科について

- ・主として「知識」に関する問題については、県平均と同等、全国平均を4ポイント上回る結果であった。しかし、「活用」に関する問題については、県・全国平均を3ポイントほど下回っている。
- ・観点別に見ると、「観察・実験の技能」は県・全国平均を2ポイント上回っている。このことから、授業で行った実験の方法などが確実に身につけていると言える。
- ・基本的な知識は身につけているが、その知識を活用していく部分に課題が見られる。生活との関連付けを意識的に行うなど、授業の中での取組が重要になってくる。

【意識調査(5・6年)】

家庭での生活について

- ・朝食摂取率が高く、起床・就寝時間もきちんと決めている児童が多いことから、基本的な生活習慣が身につけていると言える。児童および保護者に対して継続して行ってきた「早寝・早起き・朝ごはん」の呼びかけが、効果的であったと考えられる。
- ・自分で計画的に学習を進めている児童が84.8%と高く、県(69.1%)・全国(67.6%)を大きく上回っている。また、98%近くの児童が宿題にもきちんと取り組んでいる。家庭での学習時間についても、「1時間以上学習している」と答えた児童が72.9%と、県(64.6%)・全国(66.2%)を上回っており、学習習慣が身につけてきている。
- ・「家で学校授業の予習・復習をしていますか。」という質問に対し、「している」と答えた児童が52.5%と県(60.4%)・全国(62.6%)に比べ、低い値を示している。家庭での学習の内容の幅を広げさせることと、質を上げさせることが重要である。自主学習への取り組み方の指導を再度行う必要がある。

地域との関わりについて

- ・「今、住んでいる地域の行事に参加していますか」という質問に対し、「している」と答えた児童が81.3%と、県(72.4%)・全国(62.7%)を上回っている。また、「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」に対しても、「している」と答えた児童が61.1%と、県(50.1%)・全国(49.9%)を10ポイント以上、上回っている。このことから、地域とのつながりの深さや、地域の一員としての所属感の高さがうかがえる。これまでの、地域、家庭と学校が連携しながら児童の育成への取り組みが結果として表れている。

2 改善に向けた具体的な取組

(1) 授業づくり、指導方法の改善・充実のための重点取組

1 基礎基本の定着と活用力を育成する授業の実践

- ・西部型授業を基本とした授業実践を徹底する。特に、本校の課題を解決していくために、学習過程の「まとめ」「ふり返り」の段階で、児童の「書く力」を付けさせることを教師が意識する。授業の中でポイントとなる言葉を児童に発表させ、そのキーワードを使って、自分なりのまとめやふり返りが書けるような指導を行う。
- ・「問われていることが何か」「必要な情報はどれか」などをつかめるように印をつけたり、「図・式・言葉」を関連付けて記入したりできるようなノート指導を行う。
- ・全体での話し合い活動の際には、ICT機器を使うことで全員が共通認識をもって話し合いに参加できるようにする。言葉だけでなく、視覚的にも確認しながら全体でのまなびを行う。
- ・教師の授業力向上のため、「授業づくりのステップアップ1・2・3」を活用した自分自身での授業評価を行う。

2 授業形態の工夫

- ・算数における基礎基本の定着のため、指導法改善担当を中心に各单元についての教材研究を行い、少人数での授業とTTによる指導を学習内容に合わせて選択していくことで、より効果的な学習を行う。

3 主体的な学びを促す環境の整備

- ・児童が身に付けなければならない学習用語をまとめ、教室に掲示する。大切な語句を確認するとともに、それを使いながら発言する意識をもたせる。
- ・児童の知的好奇心を高めるようなコーナーを設置する。(レベル別に数種類問題を準備し、自分で選択させたり、身近なものの単位を感じられるような掲示を準備したりするなど)

4 学びに向かう態度の育成

- ・学習用具の確実な準備や時間を守ることを徹底させる。また、「挨拶、返事、言葉遣い」など、望ましい学習態度を身に付けさせるよう、全職員で取り組んでいく。

(2) (授業以外) 児童・生徒の課題改善のための重点取組

- 1 朝の時間に行う「花まるタイム」の実施方法や内容について定期的に意見交換を行い、学力の向上につながるよう学校独自に改善を図っていく。
- 2 家庭学習の習慣化、また、主体的に学ぶ力を身に付けさせるために、自主学習に取り組ませる。予習・復習の仕方を学年に応じて再度指導を行ったり、メニューの紹介をして取り組む内容の幅を広げさせたりすることにより、考えて学ぶ力や習得した知識や技能を活用する力を育成する。
- 3 毎月1日の「ノーテレビ・ノーゲーム」について実施を継続するとともに、家読の推奨（毎月1日）をする。
- 4 漢字検定、計算検定を年3回実施し、全員合格を目指す。昼休みに補充の時間を取り、全員を合格させることで、児童に達成感を味わわせる。
- 5 長期休業中の課題プリントを作成し、取り組ませるとともに、課題の提出を徹底する。
- 6 Q-Uテストの結果をもとに研修を行い、学級づくりの充実を図る。